

第二十八回

光照寺報恩講 法話

「真宗の要——『獲信』」

廣瀬 惺先生 講述

(元同朋大学教授、妙輪寺住職)

〈開式挨拶 平山正三護持会会長〉

皆様おはようございます。六月の護持会総会から会長という職を頂きました平山と申します。宜しくお願い致します。今日は我々真宗門徒にとって最も大切な法要の報恩講という事でお参りを頂きましてありがとうございます。皆さんご存知のように報恩講というのは親鸞聖人のご恩徳に報いる仏恩報謝の仏事として勤めるといふ事であり、これはお寺のご案内の言葉でありますので皆さんが日頃どのように御恩徳に対して感謝申し上げているかという事もあるかと思ひます。私の場合をとりますと朝晩の勤行、これが一つの感謝を表す方法かなあと私は思つて毎日勤行しているのですが、今日お出での皆さんも多分毎日勤行されていると思ひます。中には勤行をしたことはないよという方もおられますかも知れませんが、出来れば今日を境にして明日からでも勤行をして頂ければと思つております。

報恩講にまつわる余計な話をさせて頂きたいのですが、先週の日曜日、私の母親の二十五回忌という事で福井の実家に帰つたのですが、帰つたのは前日の土曜日に帰りまして兄貴と話をしていたら明日、法事の後に「ほんこさん」をやるよと言われたのですが、私は田舎を離れて六十年近くになりますので「ほんこさん」と言う意味が分からなかつたのですが、私の田舎では報恩講の事を「ほんこさん」といふ呼び方をしています。「ほんこさん」つて何やると聞いたら、お

寺さんが門徒さんの家を一軒一軒回るといのが家の風習のようです。大体、門徒さんが三百位ありますでしょうか。法事のお勤めは大経をあげると。あんまりにも長いので足はしびれるし、お坊さんはお経が速すぎるので何を唱えているのか分からないのですが、『大経』だと分かったのは『仏説無量寿経』と最初の出だしで『大経』をあげておられるのだと分かったのです。どこまで読んでいるのか分からなかったので後で聞いたら『大経』の「上巻」を今日お読みしたのですと。「下巻」までやったら二時間以上かかるので「上巻」だけですと。その後、報恩講に入りますということで『正信偈』念仏・和讃・回向が終わって、お茶を飲みながら、「お寺さん相当件数があるでしょう、一軒一軒回るのは大変ですね。どれくらいかかってやっておられるのか」と話を聞いたら九月の始めから年末まで四か月かけて約三百軒の門徒さんのお家を回っていると。小さい寺ですから住職は一人で、しかも学校の先生をやっておられるので、門徒さん回りは学校が休みの日にやられ、一日に一四、五軒回るのでしょうね。そのようにしてやるのが実家の田舎のやり方だと。お寺での報恩講はまた別にありますから門徒さんはそちらの方にもお参りをすると。念の入った報恩講でございます。光照寺はこの一座法要に気持ちを集中してお勤めします。今日一日皆さんどうぞ宜しくお願い致します。

〈光照寺住職 挨拶〉

先生ようこそ光照寺の報恩講に遠路お出で頂きましてありがとうございます。この日を楽しみにしておりました。

この度、廣瀬惺先生をお迎えして光照寺の報恩講第二十八回目をお勤めするという非常に記念すべき報恩講と位置付けて先生のお話を心ゆくまで拝聴させて頂きたいと思っております。ご

先程お齋を頂きながら先生に伺いましたら、先生のお寺は蓮如上人の時代からあるお寺で、十二代目だということでした。光照寺は私が開基で副住職が二代になるという若々しいお寺ですが、先生のお寺は歴史の深さ厚さ重さがあり、違いをまざまざと先生から照らされた様な思いでした。

今回、廣瀬先生のご講題の「真宗の要―『獲信』―」という、これこそ中心を穿つ本当に大事なところをぎゅっと抑えることが出来る先生だと頂いております。私は先生のように学識深く学ぶことが出来ないものでございますけれども、『正信偈』に「獲信見敬大慶喜」というあの言葉の重さを感じております。「獲信見敬大慶喜」これは親鸞聖人の七百五十回忌の時までに何回かコピーと言いますか、複写版が出たのですが七百五十回忌の時の坂東本の複写は原本にそっくりな

ように、紙の質も折り方も、それから朱で直された赤い色も、墨で何回も書き替えた濃淡もそっくりなように七百五十回忌の坂東本の複写は制作されたわけです。私も是非買ってみたと思います。まして光照寺の寺宝にしてあります。聞法会で一番活用したのは「獲信見敬大慶喜」のところでありました。何故そこだけを何回か引つ張り出してみたのか。これはある先生のご指摘だったのですが、善鸞義絶の後に再々に裁智再考を重ねていく中で最後の親鸞聖人の裁智再考のところが「獲信見敬大慶喜」だと。そこを何回も書き替えられている。消しては書いて、消しては書いて、赤で書いてと最後に残ったのが「獲信見敬大慶喜」ですから、それが先生の要としておかれていることに重ねて感動しました。親鸞聖人もいかに要として押さえて『教行信証』、「真仏土」、「化身土」と書かれたり、「真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。」といいなから『正信偈』で全て現わせられるわけですが、その「獲信見敬大慶喜」、何回も最後まで筆を入れられていました。これと重ねて獲信というところに親鸞聖人のその最後の最後のその筆を入れられたところを何かイメージとして勝手に描きながら先生のお話を楽しみに、今日の日を皆様と共に楽しみに聞かせて頂けるのではないかと思つて喜んでおります。ポイントはすでに資料で配られており、骨格を既に示されているわけですから本当にありがたいことだと思つております。先生、どうぞ宜しくお願い致します。

2018年 報恩講 廣瀬惺先生 「真宗の要―『獲信』―」

(1)

ご住職様から過分なご紹介を頂きました。おっしゃって下さいましたように元同朋大学教授ということです。教授と言いましても、四十九歳から同朋大学へ勤めさせて頂き、同朋大学には二十年弱ですからそれ程長い間大学の教員をやっておったわけではありません。今は妙輪寺というお寺にあります。

先ほどご住職様からお話をお聞きしておりました、私が住職をさせて頂いておりますお寺とは真逆だなあと思ってお聞かせ頂いております。初めてお邪魔したせいかもしれませんが、十時半までということでおちらにお邪魔をさせて頂いてこのあたりの風景とか、ご住職様のお話とか、それから皆様方と先ほど一緒に食事をしながら、何か親鸞聖人が関東でお住まいになりご教化なさったという、そういうものが、どこかふつふつと湧いて出てきているような気風が感じられるところだなあという思いがしておりました。

ご住職様はバイタリティーがおありで、私よりも年上ですが私などが及びもつかない。こっちは今にもなくなりそうな、息絶え絶えの思いで住職を勤めさせて頂いているようなことです。

と申しますのは、私が住職をしているお寺があります村は、一時は日本有数の過疎村でした。今は合併してしまいましたので分からなくなっておりますが、私が子供の頃は三千あった人口が今は三百人を切っています。そういう中で住職をさせて頂いているわけです。

先ほど、ご住職様がおっしゃって下さいました中で信心についてお話がありました。信心が確立しておるのかと言われますと、決して確立しておるとは言えません。良く言えば、だからこそ親鸞聖人の教えを尋ねていると申しますか、そういう形で歩ませて頂いているものであります。しかし、こちらの大切な報恩講にお招きを頂きまして、迷いながら尋ねているわけでありまして、れど、そういう中で頂いておりますことを一つの問題提起のつもりで話させて頂きます。私はこう頂いているけれど皆様方はどうお考え下さっているのだろうか、そういうつもりでお話をさせて頂いて、後、質疑の時間が三十分間設けられておりますので、皆様のお考えとか私の話について疑問に思われることとかをお出し頂ければと思います。そして、ご一緒に親鸞聖人の御法を何か一点だけでも確かめることが出来れば、そんなつもりでお話をさせて頂ければと思います。

(2)

先ほど、ご住職様から題をお褒めにあずかったわけであり。題をつけましたのは九月の始めでしたけれども、副住職さんの方からテーマを出すようにと依頼をされまして、それを受けて

なかなか決まらなかつたんです。それで、ぎりぎりテーマを送らせて頂いたようなことでありました。「真宗の要」という題を出しました思ひは、どういう題にしようかなあと思っております。困りますと自分に出てまいりますのは曾我量深という先生のことです。こちらはずっと櫟先生が報恩講に長らくお越しになられたとのことです。お名前をお聞きになっておられると思います。

その、曾我先生のこと念頭に出来たのですね。と申しますのは、曾我先生という方は真宗の御法を頂くについては、要を抑えることが肝心だと。それこそ、これが肝心要だということをご指摘し続けていかれた先生です。そういう意味で、先生ご自身が常にその時頂いておられる親鸞聖人の御法の要を一つのテーマとして打ち出されながら、九十六歳で亡くなって逝かれました。去年が四十七回忌でありました。

(3)

私自身、年と共にかげがえのないことだったなあと思ひますのは、私は昭和四十年に大谷大学に入りました。いろいろ申し上げている時間はありませんが、一言で言えば親父に騙されて入ったようなものなのです。しかし入りましたら、その時曾我量深先生が九十歳で学長をなさっておられたのです。そして、毎週一時間半の授業を九十歳から九十五歳までだったかと思ひますが、

なさっておられたのです。その頃は、内容は全くわからないので座っていただけでですけど、それでも四〜五年の間、曾我先生のお声に接することが出来たということが私の今を成り立たせているというか、そのことを歳と共に思わされております。

どういう先生かと言いますと、最近僕は一言で表現しているのですが、「生涯聞法現役の先生」だと。九十六歳で京都日赤でお亡くなりになったのですが、三重県の伊東慧明という先生が、亡くなるまで「勉強して運動して」と繰り返しおられたということを教えて下さっています。「勉強して運動して」と。今にも命終えようとなさる先生が「勉強して運動して」とおっしゃっておられたと。「生涯聞法現役」です。そういう曾我先生のイメージでございます。

先ほどご住職様と話していて思い出したものですから言わせて頂きますと、私はその頃は曾我先生と言いましても自分から進んでということではありません。周囲の方々によってということなのです。一人では聞けないのですね。先輩方とか大谷大学の先生方とか、そして、その頃は外から曾我先生のお話を聞きに来られる方が何人かいらっしやいました。そういう方々に釣られてということですよ。そういう方々が、立派な先生だとか、あの先生の話はもう聞けんぞとかと教えて下さるわけです。一人だったらとても聞けない。周りの方々の思いとか言葉を通して、自分では分からないけれども、ともかく座っていました。それが私の学生時代でした。それが、ふとして芽生えてくるのですね。

今でも覚えているのですが、三十二歳の時、他の職場に居りました。何故か知りませんがその頃、曾我先生を読みたいと。三十二歳ですから今読んでおかないと読む時間がないと、私なりに決断しました。最初は、その一年前だったのですが、その時は女房に猛反対されました。食べていけないのではないかと。そのころ四十五軒の御門徒さんでした。とてもではない。ですから、その頃は夕方家に帰る時間になりますと吐き気がしました。それは三十一歳の時で、帰ろうと思つた一回目でした。三十二歳の時になりましたら、女房も帰ろうと言ってくれまして帰りました。それからしばらく、お寺で曾我先生のものを読んできました。読んでも分からないのですが、言葉が響くのですね。響くことを喜びとして、ともかく頂いていたということです。

僕が言う資格は全くないのですが、曾我先生がおられなければ何をしておったのだろうかというくらいなのです。それは、大学の頃にお姿と声を聞かせて頂いた。それが出発点になって、今でも曾我先生のことを頂くのが一番心が休まります。仏法で大事なことは休まるということでしょう。休まるとか喜びとかそういうことがないと、嫌でもいいから聞けとか言われても聞けるものではありません。そういうことが支えとなって曲がりなりにも七十二歳のこの歳まで、歩ませて頂いているというのが私の実感です。

そういうことで、曾我先生が真宗を学ぶのには要が大事だということを教えて下さっています。そのことから、「真宗の要」と題をつけさせていただきました。そして副題を「獲信」といたしました。副題については最初迷ったのですね。

と申しますのは、先ほどもおっしゃって頂きましたように、私のお寺は蓮如上人の時に真宗に転派したお寺なのです。ですから、御門徒さんでも、蓮如上人の『御文』に親しんでおられるわけです。昔は炭焼きがありましたので、『御文』様を持って行かれて仕事の合間に読まれたというのを聞いています。そんなことがあって、私自身も『御文』には非常に、これは歳をとってからです、門徒さんの影響かもしれないませんが親しみを覚えております。そんなことがあり、『聖人一流』を資料として今回挙げさせて頂いておりますが、「獲信」と『御文』の言葉とのどちらを副題にしようかと思っただのです。資料をご覧下さい。

聖人しょうにんいちりゅう一流の御勸化ごかんけのおもむきは、信心しんじんをもって本ほんとせられ候う。

〔御文〕五の一〇 『真宗聖典』八三七頁

(親鸞聖人から伝えられてきている教えのお心は、信心を根本とするということでもあります。)

意味は私の訳です。親鸞聖人から伝えられてきている教えのお心は、信心を根本とするということであります。その「信心をもって本とせられ候う」を副題にしようかとも思ったわけですが、しかし、そうするとどちらがテーマかわからなくなる。長すぎてですね。そんなことがあって、もう一つ念頭にありました『正信偈』の、先ほどおっしゃって下さった「獲信」という、そちらの方を副題として出させて頂いたわけです。そんな経緯でございまして、先程御住職様がおっしゃって下さった「獲信見敬大慶喜」を、深く考察してつけたということではございません。どちらにしようかなあとという思いの中で、「獲信」という方が端的な表現ですから印象に残るだろうということがありまして、「獲信」というテーマを出させて頂いたようなことです。

(5)

この「聖人一流」の『御文』というのはご存じかどうか知りませんが、蓮如上人が五十七歳の時に吉崎で真宗再興をなさろうとされて、七月二十七日に吉崎別院の起工式をなさっております。その頃にお作りになった『御文』が、「聖人一流」の『御文』です。蓮如上人も、まず親鸞聖人の教えを再興していくにあたって親鸞聖人の御法の要は何かと、そういうことを確認なさったのでしょうか。そのことが明確でなければ再興はできませんでしょう。聖人の教えの要は「このことだ」ということを、蓮如上人御自身が確認なさったのでしよう。そのことでは、上人の再興へ

の歩みは、親鸞聖人の御法の要は信心だという確信を得られたことから出発していかれたと言つてよいのでしょうか。そういう大事な『御文』が「聖人一流」です。

ついでに申し上げますと、もう一つ大事な『御文』が「末代無智」です。あれも吉崎時代です。蓮如上人が仏様の心とは何ぞやということを、「これすなはち第十八の念仏往生の誓願のこころなり」ということで表して下さった貴重な『御文』です。「聖人一流」と「末代無智」という二通の短い『御文』です。私は、もちろん「聖人一流」も大事でありますけれども「末代無智」が大好きで、飽きるまで、お寺の永代経とかお彼岸になりますと読んでいます。ご縁さんまた「末代無智」ですかと。自分が飽きるまでですね。飽きると「それ、八万の」と、そういう形です。

末代無智の、在家止住の男女たらんともがらは、こころをひとつにして、阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、さらに余のかたへこころをふらず、一心一向に、仏たすけたまえともうさん衆生をば、たとい罪業は深重なりとも、かならず弥陀如来はすくいますべし。これすなわち第十八の念仏往生の誓願のこころなり。かくのごとく決定してのうえには、ねてもさめても、いのちのあらんかぎりは、称名念仏すべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。

（「御文」五の一 『真宗聖典』八三二頁）

話をもどしまして、蓮如上人が「聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもって本とせられ候う。」と、親鸞聖人の御法の要は信心であるとおっしゃっているのですね。何に対して要だとおっしゃっておられるのか。一つには親鸞聖人の御法全体の要だということでしょう。全体の要だということとは、今日は浄土のことを少しお話をさせて頂こうかと思つて参つたのですが、浄土ということも、あるいはお念仏ということも、その全体が信心の一点が明確になるならば曇りなく頂かれるのだと。こう申し上げてよいと思ひます。要ということはそういうことでしょう。このことが明らかになれば親鸞聖人の御法全体が、そうかそうかと頂けてくる。逆に言いますと、その要を外しますといふようなことがあるけれども、いざ頂こうと思つと頂けない。頂けたつもりにはなるかも知れませんが、いざという時に間に合わないわけでしょう。要がはっきりしておりませんと、こちらが何も問題がない時にはありがたい、ありがたいと頂けるわけですが、いざという時に手がかりがない。そういうことで、要ということは、僕は大事なことではないかと頂いております。

余分なことを言わせていただきますと、最近、浄土は死んでからあるのか生きている時に開けるのかどちらだと。皆様方もひよつとしたらお聞き及びかと思ひますが、そういうことが一部の方々の間で論争というか、そういったことがなされております。皆様方はどのようにお考えでしょうか。お浄土は死んでから行く世界なのか、現在開かれる世界なのか。結論から言いますと、

自分の思いでは決められないのですね。思いは縁によって変わりますから、現在開けると思っても、いざとなった時には死んでからだとなるかもしれません。人間の思いで決められるものは何一つないのでしょう。縁によって変わるわけですから。そうしますと、浄土ということも信心の一点において明らかになると申し上げていいのではないのでしょうか。

逆に言いますと、信心がどこかでというか、宗教の問題は「どこかで」ということが大事だと思っているのですが、あんまりこれだと握ってしましますとろくなことがないです。宗教の問題はどこか私たちを超えていますから、人間生活を超えているから支えになるということがありません。しかし、それをあまり握りしめるような形になりますとこちらに持ち込んでくることになり、ろくなことはありません。しかし、どこかで信心が明確に自分の上に頂かれておりませんと、浄土という問題ははつきりしないと思います。

そういうことで、親鸞聖人の御法について浄土とは何かという問題は信心の一点において、間違いないこととして受け止められてくるということが「聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもって本とせられ候う。」とおっしゃっておられるお心だと申していいかと思えます。

もし、浄土がはつきりせんと思っておられる方がおられましたら、信心をはつきりしなさいということをおっしゃっているわけでしょう。そういうふうには、私自身は受け止めているわけです。さらに申しますなら、救済という問題は信心において成り立つことだと。信心をはずして、救い

とは何かと一生探しても見つからない。信心において救いが明らかになる。そういうことでしよう。もし、信心抜きに救いということが言われているとしますなら、本当の意味ではたすからなのではないでしょうか。

(6)

信心によって救いは明らかになる。さらに端的に言えば、信心によって救いは開かれる。こう申し上げていいわけでしょう。では信心とは何か。今日は、最終的にそこへ自分としては辿り着きたいと思っているわけです。

そうしますと、親鸞聖人は救いをどう教えて下さっているのか。これは、先ほどから申し上げておきますように浄土が開かれることが救いだ、ということになります。浄土が開かれることが救いだ。それは、浄土真宗ですから間違いないことでもあります。浄土が開かれることが救いと。それでは、浄土は何において開かれるかと言うと、信心において開かれる。これも目印として、親鸞聖人のお言葉を資料の「1」―②に挙げさせて頂きました。

一心は即ち清浄報土の真因なり

(『教行信証』『聖典』二四〇頁)

(信心は、浄土を開く確かな因です。)

一心は即ち清浄報土の真因なり。意味は私が書きましたが、「信心は、浄土を開く確かな因です」ということです。「二心」とは信心のことです。信心につきましては後程私の了解を申し上げさせて頂きますけど、「一心は即ち清浄報土の真因なり」。真因の真は親鸞聖人は「偽らない」ということで、裏切らないということだと。真ということは裏切らない。「真」について親鸞聖人は、二つの意味をとっておられます。裏切らないということと「諂^{へつら}わない」と。諂^{へつら}わない。人間に妥協しないということ。真因ということは、簡単に妥協しないということなのですね。私たちが、分かるまで私たちに妥協しないのです。分かった時に良くわかってくれたと。それが諂^{へつら}わないという、真の字の持っている意味でしょう。そして「偽らない」、裏切らない。必ず浄土を開く。それが信心だという意味で親鸞聖人は「一心は即ち清浄報土の真因なり」と。諂^{へつら}わないということは、私が頂けるまで寄り添ってくださるということになります。仏様は、浄土が私に頂けるまで寄り添って下さる。

それで、最初に浄土の方から今日は話させて頂いて、最後に要であります信心についてお話しさせて頂こうと思っております。

(7)

浄土というと、どう私たちは頂いておるのか。こちらの皆様方は日頃聞法を重ねていらつしや

いますから、こんなことを思われる方はいらっしやいませんでしようが、普通は死んでから行く世界ですよ。死んでから行く世界。宝の木があり宝の池があり鳥が飛んでおり音楽が奏でられている。そんなもの信じられるかというのが普通ではないですかね。

一昨日でしようか、宇治の平等院がライトアップされたといつてニュースで、極楽浄土の荘厳を美しく照らし出していますとやっていました。親鸞聖人がおっしゃる浄土はそういうものではありません。そういうものなら、私たちの生活とどこかかけ離れております。それは美的な鑑賞の世界であるかもしれませんが、私の上に救いを開いて下さる世界ではございませんでしょう。美しいことを浄土と言っているだけであって、色々な問題を抱えながら生きておる私を救う世界ではない。慰めにはなるでしょうけれどもですね。美的な要求が満たされるでしょうが、「ああ救われた」とはならないでしょう。宇治の平等院のライトアップを見て、ああ救われたとはならない。

親鸞聖人という方は、事柄をとことん突き詰めていかれた方です。法然上人の教えを頂かれて納得できるまで突き詰めていかれたのが親鸞聖人でしょう。ですから、おそらく法然上人の門下にいらっしやった時は嫌われていたと思いますよ。大体『御伝鈔』を読みますと三つでしたか、先輩方に問題を吹きかけておられますですね。法然様の信心と善信房の信心が一緒だと。なんということを言うのだと。あるいは行不退、信不退、何ということをするのだと。徹底して突き詰

めていかれた。だから親鸞聖人のお名前は法然上人の御門下の方が書かれたものには、一切出てこないのです。あれは嫌われた証拠だと思えます。それくらい問題を突き詰めていかれた。曾我先生は、一千年後二千年後になっても教えを間違えないように親鸞聖人は極め尽くして明らかになさって下さったとおっしゃっておられます。

『正信偈』に「善導独明仏正意」とあります。「善導独り仏の正意に明らかなり」と。善導大師という方は仏様の真意を極めつくして下さった方なのだ。私たちの根性で言うなら、もし法然上人がお読みになられたら、法然上人は面白くないでしょうね。夢でも法然上人の夢をご覧にならないですよ。全部、聖徳太子の夢です。法然上人の夢を見たとき親鸞聖人はおっしゃっていません。

そして、先ほどご覧になられました坂東本の『教行信証』。その文字が書かれているところは濃い茶色になっています。その茶色は、おそらく柿の渋が塗られているのだらうと。ということとは、ずっと後世にまで残そうと思われたということでしょう。親鸞聖人は、人類に捧げるものとして『教行信証』をお書きになったのです。それも関東の田舎です。よく書かれたと思います。僕らが書くときは大学で位がもらえるところかあるわけですが、位ももらえないわけですよ。関東の田舎で、人々と一緒に生きておられる中でこのようなものを書かれたわけです。田舎でこれだけのものを著された方は古今東西、ちょっといらっしやらないでしょう。それをまた、田舎

で書いたから燃えてもいいというものではないのですよ。人類の為に残そうというのですから。柿の渋は防腐剤と防湿でしょうね。田舎で書かれて、それを人類に永遠に残そうと、こういう気概でいる方はいないのではないですか。田舎に引っこんだらもうしょぼしょぼするのではないですか。都会におると中身はないけれども空気で頑張ります。しかし、田舎に行ったらもう本当に防人みたいなものですよ。それを親鸞聖人は関東の田舎で筆を五十歳の頃に起こされた。完成されたのは京都で九十歳の時。ですから四十年間かかって書かれた。

先ほど御住職様がおっしゃった、『正信偈』の「獲信見敬大慶喜」の所は特に何回も書き直しておられるわけです。これだけでも四回も。これを見ただけでもご利益がありますね。学ぶ意欲が起ってきます。ともかく、徹底なさっていかれた方が親鸞聖人という方です。

(8)

それで、『教行信証』の中で、善導大師のご文を中心にして浄土を開く信心を徹底して明らかになさろうとしたところがございますが、その直前に、同じ善導大師のご文を置いておられるのです。そのご文を受けて、親鸞聖人は浄土を開く信心とは何かを明らかにしていられるわけです。そのご文というのが、資料の「2」——①です。

五濁・五苦等は、六道に通じて受けて、いまだ無き者はあらず、常にこれに逼悩す。もしこの苦を受けざる者は、すなわち凡数の撰にあらざるなり。

（『教行信証』『真宗聖典』二一四頁）

逼 ↓ セム 悩 ↓ ナヤマス

この文章を置いて、善導大師のご文で浄土を開く信心とは何かを極めていかれるのです。このご文は大事なご文なんですね。一度、読ませていただきます。「五濁・五苦等は、六道に通じて受けて、未だ無き者はあらず、常にこれに逼悩す。もしこの苦を受けざる者は、すなわち凡数の撰にあらざるなり」と。

言葉は難しいです。逼悩の左側に親鸞聖人はわざわざカタカナで、「セム」、「ナヤマス」と書いておられます。それを、下に書いておきました。細かいことは申し上げませんが、「五濁」とは時代社会の問題、苦悩であります。五濁悪世と申しますでしょう。五濁とは時代社会の問題。今で申しますと災害とか戦争とか、中国とアメリカとの争いとか、そういうことが五濁の一つの姿です。原発もそうです。五濁の姿でしょう。良い悪いの問題ではなくて五濁の姿です。次から次へと時代社会の問題が出てまいります。親鸞聖人には親鸞聖人の時代の問題があったでしょうし、現代は現代の問題があります。五濁とはそういうことです。

もう一つ「五苦」とは浄土教独特ですね。普通は四苦八苦です。普通は四苦八苦。五苦というのはまあないです。浄土教の特徴でしょうね。五苦とは生老病死と愛別離苦です。

生老病死 愛別離苦

愛する人との別れ。これを超えろということでは容易なことではないでしょう。私は毎日新聞ですが、今朝の新聞に、八十いくつかの男の方が妻に先立たれてという、読んだらとてもやるせないことを声の欄にお書きになっておられました。愛別離苦というのは、出家仏教にはないのですね。浄土教の特徴です。愛する人との別れ。容易なことではないです。それを五苦と申します。

それらを受けて善導大師のご文では、「六道に通じて受けて未だ無き者はあらず」とございませう。六道とは「地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天」です。地獄とは見るからに苦しうなところ、うのが地獄です。極苦処といいますが、苦しみの境遇です。誰が見ても生きていくのは大変、だろかなあと。そういう、人が住んでいる境遇を地獄。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天と。天は見るからに楽そうだなあと。そういう境遇に生きている人を天と。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天というのは人間の境遇です。あの人は悩みがないのではないかと、それは天ですが、苦しみが無いということはないということです。「この五濁・五苦等は、六道に通じて受けて未だ無

き者はあらず」と。楽そうに見える人であれ、子供であれ、どのような人であれ、苦しみを受けていない者はいない。常にこれに逼め悩まされているのだと。もしこの苦を受けていない者があるのなら凡夫から外れているのだと。凡夫である限り、どのような人も、すべての人が抱えておるのが五濁五苦という苦しみののだと。こういうのです。

これは善導大師の文章ですが、こういうことはなかなか言えないですね。僕など、あの人は苦がないのではないかと。遠藤周作さんのものを昔読んでいたことがあったので記憶に残っているのですが、「もしあの人は苦しみが無い人だろうと思う人が一人でもあるとすれば、それは、その人の人間理解の浅さだ」とありました。そのように、遠藤周作さんはおっしゃっております。あの人は苦しみが無いのではないかと。もしそういう思いがする人がいるとするのなら、それは僕自身の人間理解の浅さであると。遠藤周作さんの言葉で以前出会った言葉です。

「常に」ですから、意識無意識は関係ないのです。身が抱えておるということです。テレビでニュースを見れば、その問題を抱えて生きているわけです。子供でもそうだと思います。そういうテレビを見ますとそれを抱えるのです。それは身の感覚でしょう。意識では「そんなことはない」と思っているかもしれませぬ。しかし、その人が重く受け止めていないかどうかは分からないのでしよう。本人にも分からないのです。そういう文を、親鸞聖人は浄土を開く信心を明らかにさせるに先立って置いておられるのです。

そうしますと、何故、親鸞聖人は浄土を開く信心を明らかにするのにこの文章を置いておられるのか。親鸞聖人がおいておられるのは、このような様々な問題に苦しみ、そのことによって、思いぎりぎりで生きておられる人もいるでしょう。また、表は楽しそうにしておりますが、深いところで問題を抱えているということもあるわけでしょう。僕は、最後のところは、一緒にという事で誤魔化しきれないものを一人一人抱えているのではないかと思っております。一緒にでは済まされないものを抱えている。それが、人間なのではないかと受け止めております。

親鸞聖人は、何故、浄土を開く信心を尋ねていく直前にこの一文を置いておられるのか。私の受け止めですが、信心というのは、さまざまな恐れを抱えてぎりぎりを生きている。そういう私たちの思いを打ち破つてと申しますか。超えてと言いますか、私たちに広い世界を開いて下さるのが信心だと。その人がどういう状況にあれ、そういう世界を開いて下さるのが信心だと。そういうこととして親鸞聖人は、信心を徹底して明らかになさっていかれたのだと思うのです。

そして、その広やかな世界が浄土なのでしょう。聖人は浄土のことを無量光明土とおっしゃっています。その無量光明土はどこかにあやふやな形であったって無量光明土ではないのではありませんでしょうか。無量光明土は、私たちの人生を成り立たせていくような、そういう意味のある光

なのでしょう。色々な問題を抱えて恐る恐る生きている、その心を破って広やかな世界を開いて下さる。その世界が無量光明土なのでしょう。どこかにあるのでは、無量光明土にはならないでしょう。

細かいことは、またご質問をとおして確かめさせて頂きたいのですが、無量光明土は有り難い世界です。有り難くもなんともない無量光明土があったって、そんなものには関心を持たないですよね。有り難い世界ということは、無量光明土ということが持つている意味ではないでしょうか。閉ざされた私の心を開いて下さる。もっと言えば、心閉ざされた私に広やかな世界を恵んで下さる。どのような時にも息をすることのできる世界を恵んで下さる。そういうものを親鸞聖人は浄土という言葉で表わしていつて下さったのだと私は頂いております。その無量光明土について、曾我先生はよく「心光摂護」という言葉でおっしゃっています。これも親鸞聖人のお言葉です。

だいたい、「阿弥陀」と言うのは喜びの表現でしょう。阿弥陀様の光は讃嘆なしには受け取れない光明無量の光。亡くなった先輩から聞いた話ですが、インドの方が阿蘇山へ行かれた時に「阿弥陀」と言って讃嘆なさったということを、本多恵という静岡別院の御輪番をなさっておられた方で、若くして亡くなられた先輩からお聞きしたことがございます。私が甘えられる先輩でした。その方から聞いたのですが、阿蘇ヘインドの方を誰かが招待されたら、阿蘇山の余りの美しさに

「阿弥陀」と言われたと。阿弥陀の光明というのは、讃嘆せずには受け取ることでできない光なのでしよう。説明的な光ではないのでしよう。

(10)

ここで、もう一つ申し上げさせて頂かなといけないのが、ここで終わらないのが親鸞聖人なので、ここで終わらない。このことをどこまで申し上げることが出来るかわかりませんので、また私の不十分なところは御住職様、あるいは副住職様がおられますので、またお話下さるでしょうが、それだけでは終わらないのです。

と申しますのは、お浄土が開かれたとしても現実には変わらないのです。私たちの根性も変わらないのです。少しはましになるかもしれないですが、蛇蝎のごとくです。いよいよ、蛇蝎が明らかになる。そういう意味では変わらないわけです。変わらない。しかし、浄土が開かれた人は信心が力となり、また浄土が開かれることによって、どこかで現実を私の生きる現実として、あるいは我が身として受け止めて生きることが出来るようになる。そこまで、親鸞聖人は押しつかれるのです。そこまではつきりしないと、信心がお酒を飲んだのと変わらないことになっていくのでしよう。資料の「2」―④です。

くじゅうごしゅよ
九十五種世をけがす

ゆいぶついちどう
唯仏一道きよくます

ぼだい しゅつどう
菩提に出到してのみぞ

かたく げんらいじねん
火宅に還来自然なる

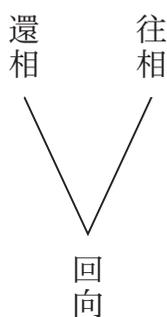
（『正像末和讃』『真宗聖典』 五〇一頁）

これは親鸞聖人の『御和讃』です。

「菩提に出到」とは浄土が開かれた人にはということ。浄土が開かれた人には、火宅です。外も火宅ですが内も火宅です。燃えさかかっております。外も火宅です。いつ休まるともなく、形は変わっても火宅であることには変わりがないのです。火宅。でも、そこに還れると言うのです。そこを、自らが生きる場として生きていかれると。内もそうです。煩惱の身だと。煩惱の身を我が身として受け止めて生きることが出来る。そういう力が信心にはあると。また浄土が開かれておれば、そのように生きて行けると。もう一言足せば、そこに身を置くことを通して仏法の御用に立たせて頂くことが出来る。そこまで親鸞聖人はおっしゃいますですね。

浄土が開かれた人は、ただ、ああ有難い有難いで終らない。浄土が開かれた人はこの火宅の現実、火宅の身をですね、それを我が身として受け止めて現実として生きていくことが出来る。「自然」ですからね。自ずからなのです。信心が力となり、浄土を開いて下るところに自ずからそうなるのです。しかし、我々は光の方に気を取られますから、親鸞聖人が教えて下さらないと光の

方に気が取られて 現実から離れていくことにもなりかねないのでしよう。仏教を頂きますと、下手をすると現実離れをしていくのでしよう。ですから親鸞聖人は、きつちり抑えて下さるので。それを親鸞聖人の言葉で押さえれば、少し難しい言葉を使わせていただきますと往相還相と。



ですから往相還相がないと救いが明確にならない。回向とは恵みということ。信心が恵んで下さる救いの内容です。往相という恵みは、浄土を与えて下さる。浄土を開いて下さる。そして同時に、自ずからこの世を生きていくことが出来る。絶望することなく、またいい加減にせず、この現実を現実として頂きながら我が身を尽くしていくことが出来る。これが還相でしよう。往相還相がはつきりしませんと、往相だけですと酔っぱらうことを求めます、仏法にです。往相だけだったら、面倒なこと、臭いものに蓋をしないと仏法が成り立たないですよ。

あまり時間がないのですが、私のお袋は仏光寺派の出なのです。ですから私は、大谷派よりも仏光寺派の親戚が多いのです。それで、以前に宗門紛争の頃に、親戚のお寺へ行くときよく言われ

たものです。お東さん何やっているのやと。肩身の狭い思いをしました。しかし、縁によつてはそういうことも起こるわけでしょう。しかし、そういう中を流れ続けている御法が往相還相の御法ではないでしょうか。それ以上申し上げることが出来ませんですけど。

そういうのが信心の利益、往相還相の恵み。どのような状況にあらうとも、この身に広やかな世界を無量光明土を間違ひなく開いて下さる。そしてこの身を尽くしていく。命終わるまで尽くしていくようなそういう生涯を私に与えて下さる。もう一つ言えば、仏法の御用にたためられていく。どんな人間であれ、仏法の御用に立つのは自分では分からないのです。立つてると言つて立っていないこともあります。立っていないけれども、孫がお念仏のご縁を開くとか、仏法のご用に立っているかどうかは自分では分からないのですね。しかし、そういう大事な身を生きているということですよ。仏法を聴聞させて頂いていることは大事な身を生きているということですよ。

そういうことでは、一言で言えば、超えて生きるということが念仏者に恵まれる往相還相の生き方ではないですかね。超えて生きる。ただ超えつ放しではないです。ただ超えつ放しではない。ただ生きるのではない。超えて生きる生活が恵まれてくると申し上げて良いのではないのでしょうか。そうしますと最後に、そのような往相還相の救いを恵んで下さる信心とは何ぞやということですよ。

信心について、親鸞聖人は『教行信証』の「信巻」の中で、問答という形をとって極めつくして下さった。それまで、信心ということがはつきりしなかったのですね。親鸞聖人まで、信心がはつきりしなかった。信心については、法然上人もおっしゃっているのです。『正信偈』の最後に、法然上人の教えとして「決以疑情為所止」とございます。しかし、法然上人は信心とは何ぞやということについて、言葉で明確にはおっしゃっていないのです。曾我先生流に言えば、親鸞聖人は、法然上人の眉間に現われているものを受け止めていかれたのだと言えるかと思えます。言葉としておっしゃっていません。法然上人の身が現わしておられたと。そのようなことを、曾我先生は時々おっしゃられます。そこに、人と遇うことの大切さがあるわけでしょう。人に遇わないと、楽屋裏まではわからないのです。本だけでは。裏に何があるかは、人に遇うことをおしてなのでしょう。

私なども、教えを頂いて亡くなられた先生方について、楽屋裏の事柄と申しますか、なんでもない雑談のような形でおっしゃられたことで、貴重なことなんだなあとして、ふっと気づかされることがあります。

信心について、親鸞聖人は善導大師から大事なことを学んでおられるのですが、ひよっとした

ら、法然上人が生活の中で「信心は善導大師様が明らかにして下さっているなあ」と、ふつと洩らされたことがあるのかなあとも思われます。しかし、法然上人ははつきりと、このことが信心であるとおっしゃっておられないのです。それを親鸞聖人は極めていかれた。

そうしますと、信心とは何かということでありますけれども、親鸞聖人の御法の一番わからないところだし、最終的にはこれは聴聞しないと分からない。それが親鸞聖人のご信心でしょう。これは蓮如上人もおっしゃっておられます。信心を得ることは、時節到来としか言えないと。時節到来としか言えないということは、自分で信じようと思っても信じられないということです。それでは、信心とはどういう心かと申しますと、一言で言えば仏様の心を頂くということでしょう。頂かれた仏様の心が信心なのです。その信心について、自分で頂けるものなら時節到来などということは言われないのです。蓮如上人に対して、「私に信心を教えてください、お願いします」と言いますが、「そうか」とは、それだけは蓮如上人といえども、また親鸞聖人といえども、お釈迦様といえどもダメなのです。これは時節到来としか言えない。

そして蓮如上人は、時節到来ということはただ待っておっても時節が来るわけではないと。用心をしての上の時節到来だと言われています。「用心」とは、心を配る。心を用いる。用心をした上での時節到来であると。では、用心とは何かというと、蓮如上人は「唯仏法は聴聞にきわまる」とおっしゃっております。聴聞にきわまる。「聴」は、本願の御法を努力をして聴くことで

しょう。「聞」は聞こえてくる。本願の御法を聴いているうちに聞こえてくるものがあるのだと。それが仏様の心でしょう。だから聴聞にきわまる。聴の所に必ず本願が表わされてくる。どこかで、本願のお心が聞こえてくる。言わば、本願が芽を出すわけです。それが仏様の心です。どんな心かと言えば「南無阿弥陀仏」と念仏申す心でしょう。

ですから、親鸞聖人は信心とは何かをおっしゃるところでは繰り返し「この心」「この心」とおっしゃるのです。信心ということを「この心」と。はつきりしていないと「この心」とは言えませんでしょう。「この心」「この心」と。では、どんな心だと。おそらく親鸞聖人にお聞きしますと、仏法のご縁の中で「南無阿弥陀仏」と念仏を申されてくる、その念仏申される心が仏様の心、それが信心だとおっしゃられると思います。

念仏は考えてみても分からないでしょう。今日も皆様方が南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とお念仏を申しておられますが、その念仏は聴聞から生み出されてくる仏様の心なのでしょう。それが仏様の心として頂けるかどうか、そのこと一つに真宗はかかっていると書いてもいいのではないのでしょうか。最近、法話が終わりますと拍手する人が多いですけど、昔は仏法聴聞の時には「南無阿弥陀部、南無阿弥陀仏」と念仏を申されたのでしよう。

大谷大学に池山栄吉という先生がおられました。信國淳先生の先生です。「その先生は、なの池山」と呼ばれていたそうです。何故かと言いますと、いつも「南無阿弥陀、南無阿弥陀」とお

念仏を称えられた先生なので、大学当局がこともあろうに「ここは大学だからそんなに念仏を称えないように」と言ったというのです。それで池山先生は「な」と言っては言葉を呑んだ。だから「なの池山」と。

そういうことでは、最終的には念仏が救って下さると言ってもいいのでしょうか。念仏が浄土を開いて下さる。念仏によって、私の思いが閉ざし切ることはない。念仏が開いて下さる世界がお浄土です。

私が大垣教区で信頼しておりました友達が今年の三月二十五日、蓮如上人の御命日に亡くなっていかれました。その息子さんが、その友人が亡くなって逝かれる時の最後の言葉が「最後に残るのは、念仏だけやなあ」だったと言っておられました。念仏ですから人間の心ではないです。人間を救っていく心、仏様の心です。その心を仏様の心として本当に頂けるような身になっていくことです。それが、仏法聴聞の一番の要になることなのでしょう。ご縁を通して、「南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏」とお念仏申される心が信心、仏様の心。そのことが頂けるようになるかどうかを抜きにしますと、真宗といってもばらばらな知識ばかりです。人間を支えていくものは、ささやかなものでしょう。お念仏が、私を救って下さる仏様の心だなあと頂かれるかどうかというところが、大事なことではないでしょうか。

法然上人の言葉として、好きなお言葉は「念仏の申されるように過ぐべし」というお言葉です。

妻を設けてしか念仏を申されない人ならば妻を設けて念仏を申すべし。一人でないと念仏を申せない人は一人いて念仏申すべし。その、法然上人の念仏申されるようにというところには、信心がこもっていると思うのです。しかし、法然上人は言葉では、それが信心だとはおっしゃっていません。

その法然上人のお言葉に近い言葉が『歎異抄』にあります。それは「念仏申される」という言葉です。三回程出てきております。信心のことを、「念仏申される」心とあります。「心」という字はついていませんが、付けてもいいと思います。これが信心でしょう。

そして『歎異抄』には、曾我先生が注目をされました、念仏の信心を非常に力強く表して下さい。持っている言葉が第一章にあります。資料の「3」―②です。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき、すなわちせつしゆふしや撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。

(『歎異抄』『真宗聖典』六二六頁)

「念仏申さんとおもいたつ心」、この言葉に特に注意されたのが曾我量深先生です。念仏申されるところには意欲があります。「南無阿弥陀仏」は意欲なしに申すことはできませんでしょう。

その念仏として表されてくる、その心を特に注意なさったのが曾我先生です。それを欲生心として注意なさいました。念仏となって表されてくる心。その言葉に注目をなさって、曾我先生は九十歳を越えてもその言葉に励まされながら、生涯聞法の現役生活を送って行かれた。それが曾我先生です。

そして、その心が言葉となって表わされましたのが、八十六歳の時の「信に死し 願に生きよ」でしょう。あの言葉は、画期的な言葉でしょう。それまでは「願に生きる」などと言わなかったのです。お浄土参りをさせて頂く、それが親鸞聖人の教えだと受けとめられていたのでしょう。それを「信に死し 願に生きる」、これが真宗だと。八十六歳の曾我先生がですね。先生は、もっと端的に真宗を表現しないことには真宗は滅亡しますとおっしゃっておられますが、八十六歳の時に親鸞聖人の御法の眼目は「信に死し 願に生きよ」だと。

「信に死す」とは、私の思いを立場にしたあり方に死ぬということ。思いは起こるので。よ。しかし、本当の立場が見つかる。私たちの思いを破って生れようとして下さっている仏様の心を立場として生きよと。曾我先生がその頃にお話をなつた中でおっしゃっておられますが、「私は、自分自身をその言葉で励ましておるのであります」と。そして「ご縁のある方に、私の教人信として、その言葉をお伝えしております」ということをおっしゃっています。

曾我先生からしますと、浄土は願が開く世界。信心が開く世界であると申し上げてよろしいの

ではないかと思えます。南無阿弥陀仏が開いて下さる世界。時には溢れるような南無阿弥陀仏もあるでしょうし、元氣のない時は、元氣のない南無阿弥陀仏もあるでしょう。念仏はいろんな形で私たちに表わされてくるのでしょうか。しかし、どんな南無阿弥陀仏であつたとしても、それは必ず世界を開いて下さるのでしょうか。そして、生涯を尽くしていけるような生活を私に恵んでいって下さる。二回向の救いと申し上げて良いのではないのでしょうか。

真宗の要ということで、要は信心である。信心とは南無阿弥陀仏である。念仏申される心であると。そのことを、本当の意味で有り難く頂けるようになっていくのが僕は聞法の歩みではないかと思えます。元氣なうちは念仏なんか何やとこう思っておりますから。先ほども申しましたが、私の友達が三月二十五日に「最後に残るのは、念仏だけやなあ」と、念仏だけは間違いない。確かだなあと。それ遺言です。そこに開かれています世界は浄土、無量光明土。讚嘆せずには受け取れない世界です。行き詰まりばかりの身に、開かれた世界が恵まれるのだと。その開かれた世界の中で、信心を、南無阿弥陀仏を力として生涯を尽くしていきたいと思うことです。

〈質疑応答〉

赤秀さん）先生、今日はありがとうございました。とても分かり易いお話ですごく良かったと思います。

質問が二つあります。一つは往相還相の話ですけども、私が聞いていたのは、往相は私の行くべき道、還相というのは他へのはたらきかけというふうに聞かせて頂いていたのですが、今日の先生のお話は往相も還相も私の生活だというふうに言われたように思うのです。その質問と、もう一つは信心を頂きたいわけです。助かりたい。信心を頂きたいと思うのですけれども、ただ私の力ではない。仏様の力である。それでは私は何をすればいいのかと言ったら聴聞にきわまるということになるのでしょうか。それをお聞きしたいと思います。

先生）最初の往相と還相。還相は他へのはたらきかけということです。他へのはたらきかけ、ただ現実を場として生きられないと他へのはたらきかけは出来ませんね。今日ちらっと申しましたのは、この現実を私の現実として生きられることにおいて仏法の御用にたたしめられるということです。仏法の御用にたたしめられることが、他へのはたらきかけが自ず

からになされていくということではないでしょうか。自ずからというのは、その人その人の性格とか仕事とかですね。僕らのように住職とか。

それはどういう形をとるかはご縁であってわからないですね。お婆さんがお孫さんとか子供さんに仏法のご縁を開くということもありますでしょう。他へのはたらきかけということは、基本的には、私の上に開かれてきた仏様がそういうはたらきかけをなさっていつて下さる。私は、その御用に立つということでしょうね。私が御用に立っているとは言えないのです。還相は、そのように共に生きることの中に成り立つ事柄。それを抜きに、上からということは親鸞聖人は否定しておられます。共に生きることの中で、他へのはたらきかけが仏様のはたらきかけとして出てくるのだと。縁によって性格によってどういう形になるかは分かりませんですね。そういう意味で、他へのはたらきかけということが還相の大事な姿だと言えらると思います。

それから、もう一つは信心を頂きたいけれども聞く以外にないのかということですが、本当にそれしかないのですね。唯、もう一つ言いますと、『正信偈』の中に「光明名号顕因縁」とありますが、あれが信心が開かれる因縁なのです。光明と名号、善導大師のお言葉によつてのものです。

光明と言うのは教えです。人ですね。光明と言いましても私たちにとって光となるもの

が光明なのです。その人にとって何が光明になるか分かりません。信心を頂きたいと思う人の光明は教えとか人です。念仏に生きておられる人です。それと名号。お念仏を称えるということですが、お念仏を称えませんと、信心が開かれる場所がないのです。ですから念仏がないと、たとえ仏様が名告り出ようとして下さっていても現れきれないのです。だから光明とお念仏です。それによって信心は開かれる。

「光明名号顕因縁」「開入本願大智海」です。「大智海」は、光明と名号がはたらいている所で、それは何かと申しますと聞法会、僧伽のことでしょう。本願と光明がはたらいて下さっている海のような世界。教団とか教法の歴史とか、そこに身を置けば、自ずから光明と名号のはたらきによって信心が開かれてくるのだと。光明名号というと面倒なようですが、もう一ついえば教えを学ぶ場所、僧伽、聞法会。光明名号のはたらいている場所は本願大智海。そこで信心が開かれる。

ですから安田理深という先生は農家のご出身の方で、真宗の本に出会われて京都に出てこられた。そして生涯、曾我先生の教えを聞きぬいた方です。僧伽に身を置けと言いつつ続けたのが安田先生です。いつ信心が開かれるかは、時節到来ですからわからないのです。明日開けるのか、いつ開かれるのかはですね。僕が出会った人で、三十年してようやく頂けたとその喜びを語っておられた方がおられました。もう亡くなりましたけどですね。三

十年間身を置き続けてようやくという方がいらっしやいました。

私は同朋大学で、一年間仏教を学ぶ専修学院みたいところで担任を十何年間させて頂きました。そうしますと、分からないものなのですよ。ある男性の方でしたが、養子にお寺に入られたのです。それが縁で大学へ入ってこられた。そうしたら夏休みが終わったら驚くほど、何とか親鸞聖人の御法を体得なさっていて、驚かされました。そういうことは、人間には分からないのですね。その人一代とはかぎりませんですね。さまざまなご縁の中で時節到来としか言えない。明日かもわからない。明後日もわからない。仏様の心は誰にでもはたらいているのですからね。

岡田さん）先生ありがとうございました。こちらのお寺のすぐ近くに住んでいます岡田と申します。こちらのお寺のご縁は長男が十五年前に自死しました。本当に先生の先ほどの五苦、生老病死は自然に分かりますけれど、突然亡くなったものですから気が動転するようなものではないです。何にも考えられない呆然としてこの私を、住職さんが見かねて聞法しなさい。法を聞きなさいというふうにおっしゃって下さいました。これが大変なお導きでした。どうして、私がこうならなくてはいけないのだと最初は愚痴ばかり言っていました。愚痴と同時に、自分もどうしていいかわからないから好きな酒を朝から飲んでいま

た。そうしましたら、身体がどこもきかなくなりまして考えることも寝ることもできなくなりました。その時に先輩のある方から池田勇諦先生の「帰命」というカセットテープを渡され、これを聞きなさい。眠れないものですから枕元に置いて先生が一生懸命おっしゃっているのですが何をおっしゃっているのかと思いつつも、ところどころと眠り、ところどころと聞き、仏法ってこういうことを教えて下さるのだなあと思いました。

それから櫟先生がこちらに来ていらっしゃいましたのでここに座らせて頂きました。先生、仏法というものはどういうものですかと私が先生に尋ねましたら、先生はその時、大きな大きな大木ですという話をして下さいました。それは一生忘れないと思います。それが私のこれを聞こうと、仏法を聞こうと思っただけが大きな大木の話でした。この大木は普通に聞いていけば普通の考えでも、もちろんりんりんと空にそびえていますので根っこのことも昔から大体昔から子供のころから聞いていますから根の張ったものだと思いますけれど、根っこが仏法ですと教えて下さったのです。

仏法を聞かないでおられないと思いました。私が小さい時の祖母が何々さんの家である人がたすかったのは仏法のおかげだと。私は新潟県の浄土真宗の土徳のある、この間もお寺の旅行で行って参りました恵信尼さんの里の近くの所なのです。どこへ行っても浄土真宗なのです。私の家は神主だったのですけれども、真宗のお話はあらこちらで聞いていた

のだと思います。お婆ちゃんがそういつていました。私も、その人は子供を三歳で亡くした人の話を私が小学校に上がるか上がらない頃聞いていた言葉なのですが、頭に残っておりました。「大変な時は仏法を聞かなくてはわからないんだよ」と言われた時は何ということなのだときっぱり分かりませんが、その仏法ということにすぐ引掛かっかかりました。この私の辛い闇をどうやったら、誰にも本当に自分の心を打ち明けることが出来ないわけです。その時に阿弥陀さんとお話してみようと思いましたが、もう一心不乱みたいですね。ときに私に光として贈って頂いたり、二回ほどありました。なる程、身体と頭と神経がとても楽になってきました。不思議なことがあるものだなあと感じています。どうやったら信心を頂けるかなということ余り考えてもいませんでした。でもとにかくこの苦しきから何とか救っていただきたい。そういうことだけでした。

そのうちに二人しかいない子供を十二年後に病気で亡くしました。私と主人は子なしです。孫は二人おります。残していつてくれましたけれど、世の中に色々なことがあるものです。でも、私は阿弥陀さんは私をこうやって楽にして下さってありがたいなあ。本当に阿弥陀さんのお蔭だと思っております。先生の今日のお話をお聞きしまして身が震えるようにこういうことなのだ、ああいうことなのだと思うって自分を省みたりしております。自分というのもこうしてお話をさせていただくのも、阿弥陀さんのお蔭だと思っておりますし、

元気にさせて頂いたのも私がいると思っただら大間違いだと思います。いつも感謝感謝です。先生の今日の話の中で獲信、信心獲得ということもありますよね。私も命のある限りは聞法に時間の許す限りはやっていきたいと思っております。今日は本当に先生にお会いできるといふ気持ちでわくわくしております。どうもありがとうございます。

先生)

先程、お話の中で申し上げましたけれど蓮如上人に親しいということがありまして、私は毎日いただかれるお聖教として『御文』に勝るものはないと思っております。わかるわけではないではなくて、わかっても仕方ないわけでこちらの心が開かれていくかどうかです。理解ではありません。感情が開かれていく。そういうことが宗教の持っている言葉の力だし、そのような力を持つているからこそ伝えられてきたのだらうと思います。理解してきた人はいないでしょう。そういう意味で、地道に通ずつ順番に五帖『御文』はひらがな本も出てまして、積み重ねですよね。

仏様の心というのは限りがないので、私たちの心では思い計れません。人間には思い計れない。そこに、仏様の心に出会われた方の言葉。そのことを表わしている言葉が、誰にでもはたらいっている仏様の心と呼び起こして下さるのでしょう。生死を超えさせて下さる言葉。そういうものに触れることが私を開いていって下さる。私は、阿弥陀さんの心に触

れられた言葉で、『御文』に勝るものは無いのではないかといただいています。私はいざと言う時になりますと『御文』様を勧めるのです。そういうことです。

住職)

岡田さんが話した話は長男さんが亡くなり、十二年経って次男さんが亡くなり、私が何もしてあげることが出来ないのですが、ある時、お参りさせて頂いた時にお内仏の所にどなたかに勧められてだと思えますが曾我先生の言葉、アメリカのロスの別院の輪番さんの奥さんの阿弥陀さんはどういう方ですかということに曾我先生がお答えになったというのがお内仏に掲げてあって、それで一つ大きく岡田さんが変わったように私は勝手に思ったのです。

それで、今度は蓮如上人に合わせてみたいと思います。「聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもって本とせられ候う」。この『御文』は一番短い『御文』ですよ。光照寺の聞法会では、必ずこの『御文』をあげさせて頂いております。

なぜこの『御文』をあげるようになったのか、そのいきさつを話させて頂きたいのですが、光照寺の旅行で広島のア芸の大瀛を訪ねる機会があり学んだことですが、お西の三業惑乱という背景があって、そうして江戸で裁判があって結局勧学が負けてア芸の大瀛、道隱が勧学に勝ったという話の中に伝わるア芸の大瀛を訪ねてみたいと広島に行った時に訊

ねてまいりました。

そこのお寺で聞いたのは、安芸の大瀛が門徒さん夫婦が来て一番良い『御文』をあげて頂きたいと言ったら安芸の大瀛は一番短い「聖人一流」の『御文』をさっとあげてさっと裏に入ってしまったと。そうしたら夫婦が、なんでもっと長い『御文』をあげてくれなかったのだろうか、しかしこれを聞いてみようと思って恐る恐る安芸の大瀛、その時は住職でしょうね、尋ねてみたらこの短い『御文』が最も親鸞聖人のお心を表しているのだと。

私はこれだけで『御文』はいいと思っているのだとこう言って、その夫婦がびっくりして「聖人一流」の『御文』を頂くようになったのだということが安芸の大瀛のお寺に伝わっていて、その文章を読んで私も埼玉に帰って「聖人一流」の『御文』を一番短くてこれが分ければ親鸞聖人のお心が伝わるのだと言って、毎回あげさせて頂いております。

私はこれを合成するとですね、『御文』の中に聖人一流の御勸化のおもむきと、岡田さんの家にあつた曾我量深先生のロスの輪番の奥様の質問で答えたあのコピーが何か長いものではなく短いものが実に心に響くというか、一つの転機になるとこういうものが相通じるものではないかと感じて、『御文』の聖人一流の御勸化と、岡田さんの悲しみを超えた一つのキーが曾我先生のロスにおける輪番の奥様の質問に答えた短い言葉に何か鍵があるように感じて余計なことを申し上げましたが、先生いかがでしょうか。

先生) 三業惑乱のことは、私はほとんど知らないのですが、「聖人一流」は短いですが、「一念發起」とありませぬ。それが三業惑乱の「一念發起」という、「一念發起入正定之聚とも釈し」とあります。そこに着目されたのではないのでしょうか。曾我先生は、三業惑乱については時々おっしゃるのです。先生は「欲生心」ということを強調なさった先生です。先ほどの「念仏申さんとおもいたつ心」について曾我先生は、下手すると自力になるのですがそうではないのだという意味のことをおっしゃいます。それは、我々の所に開かれてくる如来の心だと。そのことに関しまして、あつもの 羹に懲りて壺を吹くということをおっしゃいます。信仰というものは命を懸けていただいでいくものなのでしょう。単なる日常性を反省するような言葉では救われないので。日常性が問題なのだから。それを破って救いが開かれるところには危険性を伴って来るといふことがあるのでしよう。三業惑乱について、そういうところに曾我先生は惹かれられたということがあるのでしょうか。

「仏様はどこにおられるか」という曾我先生の書ですが、その頃お金がなくて買えなかったのですが、もったいないことをしたなあ。時々、どこかで見かけますと羨ましいなあと思います。あれは、非常に丁寧なお言葉です。同じようなお言葉がもう一つあるんです。すよね。

それは日本で、あるお母さんがお嫁さんに「自分は病気で代わりに聞いてきてくれ、そして帰ってきて私に曾我先生のお話を教えてくれ」と頼まれたわけですよ。しかし、お嫁さんは聞いてもちんぷんかんぷんで分からないと。それで、曾我先生の控室へ行かれて困ってしまった事情を言われたら、曾我先生が紙に「仏様はどこにおられるか」というロサアンゼルスよりは、少し短いですが、同じようなお言葉を書かれた。それで二種類あるんですね。仏様は、南無阿弥陀仏と名告って下さっているのだと。称名念仏ですね。称名念仏がないと仏様は宿る場所がないのです。そうしますと、仏法と言っても理解を超えられないのです。

淡海)

お話を聞いていて、救いとは何かという問題ですが、そこを浄土真宗が言わんとしている意味と、一般的に思っているいわゆるゆるゆるの仏法を聞いたことのない人たちが仏教に求める救いとの違いというものがありませんよね。そのところが一緒になってしまっている私たちがあるという問題が一つあって、それが、浄土真宗そのものをすごく聞く側としてその辺が分かりにくくしている。つまり、よくなるのが救いだという世間的な認識がものすごく強いです。なんでも生活が良くなるか、病気が治るとかから始まって、苦しいことがあってもそれが楽になるとか、そうではない部分、つまり自分をどう見ていくかとかという

部分を浄土真宗が発してくれているのだと受け止めていて、そこが本当にこの教えの一つの持っている智慧、私にとっての喜び、それがないと浄土をどこで見るかの問題になった時に、今ここ、というところに見られない。つまりそうでないと死後往生的な問題とかを結論にしてしまう。終着点にして持つていく、そうではないということをはっきりさせたいと思って聞かせて頂いております。

つまり、私にとってはやっぱり今、自分の持つている問題、私も実はここにご縁があったのは愛別離苦なのです。それも突然の考えられないようにその当時、私は山から突き落とされたとか坂から落とされたとか言いましたが、殺されていった主人を思いますとそういうことも感じたことがあります。そういう問題は避けられない問題であってそれはそれとしましても、今私にここに生きていますので、そこにどういふふうな形で仏法を聞き続けて来たのか、来られたのか、またこれから先どうやって聞き続けていこうかと思つた時に、やっぱり問わなくてはいけけないのはここに私がどうやって救われていくのか、救いとはどういふことなのかということをおうと頂いております。そういう問題を言った時に、自分をどう内観していくのかという時に究極は煩惱の身であるとかという浄土真宗的な表現で、煩惱を持つている身だから、煩惱を持つているから聞き続けられますよとかそういう表現はしていけませんけれど、どこかそういう言葉を発した時に自分の中でと

どめを刺しているというのか、本当に限界を作っている自分がいると感じます。そこが、初めて私においては自分を越えたお念仏、阿弥陀様、南無阿弥陀仏が感じられていくところですよ。

死ななくてもいい、追いつめなくてもいい、ぎりぎりな線を感じた時に本当の救いというか、生きていける、生かされているということを感じているのが今の状況です。

また、今の状況において私にとって課題になっているのは共にということなのですが、先程も先生が共にということを選相のところでも出されていましたけれど、共にという問題も自分の中に主体的に共にという問題を掲げて言葉に出していくと、そうするとやはり私は違っているように感じているのです。つまり共にという言葉も如来から出てくる言葉であって、共にだから私が何かをしなくてはならないと言ったら私はできません。だからすべてそういう意味においては如来から発せられる言葉ではないかと感じております。こんな今心理状態というのか状況ですが、先生いかがでしょうか。

先生)

宗教のぎりぎりのところにあるものは、自分自身の生き苦しさを切り開いていく営みだと思っております。そこを外しますと教理になってみたりしますから、私が私において生き苦しき、行き詰まり、それを破りながら歩んでいく、それが一番底のところだと僕は思い

ます。ですから、そのところを今のこととして表現するしかないと思います。

親鸞聖人は『歎異抄』で、「親鸞においては」としかおっしゃらないですね。真宗ではとは言われません。ぎりぎりのところを切り開きながらご縁の中で言葉として表現するしかありません。表現できない時は沈黙するしかない。そういう形での、昔の僕らの時代の言葉で言えば、ベ平連的な僧伽というか、それが仏教の集まりの型だと思います。しかし、唯そのことだけでは消えていきますでしょうね。ですから歴史の必然としか言えないのですが、蓮如上人という方が出てこられて僧伽という形をとって下さった。こういうことが貴重なことだと思います。それも、そういう動きが信心の中にあるのかもしれない。共に救われていきたいという願いがですね。ただ、基本は僕なら僕が行き詰りを破りながら明らかにしてきたことを語り合う。そうとしか言えないものがありますね。ですから、今日、申し上げたことが明日になると変わりますね。縁によって変わります。ただし、どのように変わっても教えを頂く中で発せられる言葉であることは間違いがない。だから曾我先生は「今」ということをおっしゃった先生です。何年何月何日に回心したとか、そういうことには曾我先生は意味を認められないのですね。今、私において頂かれていますかどうかですと言われます。

例えば、今の救いという問題でも「浄土とは何か」等の三ヶ条の質問を仏教青年会か何

かが曾我先生に出されたのです。それに対して曾我先生は、「一般論には答えられません」と。「曾我量深にとつて浄土とは何か」と問われるなら私は答えますと。一般論には答えられませんと、はっきりおっしゃっております。ですから、宗教は出会いの中で語りあわれ、歩まれていくのでしょうか。一方的に語れるものではないと思います。

残されている言葉ですが、親鸞聖人はお説教は断られたと言います。そのことを法然上人の前で誓われたのだと。伝えられておりますのは、関東時代でも太子堂などでその土地の人々と語り合われた、と。それが親鸞聖人の関東の僧伽の形だろうと正親含英という先生が言っておられます。

ですから、今の私にとつて救いとは何か。そのことについては、自分からは導き出せません。教えを頂くことの中で、私なら私において精一杯に今のこととして表わしていくしかないでしょうね。曾我先生については、津曲淳三という方が随聞記を書いておられます。津曲さんは曾我先生についておられましたから、曾我先生の言行録を『親鸞の大地』という貴重な本を出しておられますが、それを読みますと、お話を終わられてタクシーの中で「今日の話は間違っております」。そういうことをおっしゃっています。津曲淳三という方は弥生書房という曾我先生の本を出していたところの社長さんの旦那さんです。社長は奥さんで、曾我先生のお話を聞きぬかれたのが旦那さんです。曾我先生は、今のことと

して話されましたので、話せない時は「うーん、うーん」と言われて、「今日は話ができません」と。

住職) 質問をぶつけて、先生にお叱りを受けるかもしれませんが、お叱りを受けたいという甘えがありまして、今、曾我先生が出たので金子先生の話と曾我先生の話と先生にお叱りを受けたいのですが、曾我先生が先に亡くなれたか、金子先生が後でしたでしょうか。

先生) 金子先生が後です。曾我先生は昭和四十六年で、金子先生は昭和五十一年です。

住職) 曾我先生が亡くなる前の病床で苦しみながらおられた時だと思いますが、「金子先生のこと」が最近分かるようになってきました」ということを言われたと読んだことがあるのです。これは何だろうと。一応聞いていたのは、曾我先生と金子先生は仲がいいけれども、教学的な一点についてはお互いに譲られないと。深い関係があっても、お互いが尊敬しあいながらも譲らない一点を持っていたと。

ところが、曾我先生が病気になるまで金子先生が見舞いに行かれた時かどうか分からないけれども、曾我先生が「金子先生の言われることが、今わかるようになってきました」

というようなことを言われたと。本で読んだのですが、この辺が廣瀬先生がおっしゃった、その揺れ動く中に今求めている曾我先生の現生という求道者と言うか、その姿が何か二重写しの様に感じられてお叱りを受けたく質問をしてみました。

先生)

曾我量深先生と金子大栄先生は子弟の関係です。教団から僧籍を剥奪されている時に、お二人共に新潟のご出身で、毎日のように金子先生が曾我先生の所へ通われたと聞いたことがあります。一対一で唯識の講義を受けられたと。六歳違うのです。しかし、それくらい関係なのです。金子先生は、自分の師は曾我量深先生ですと。

しかし、晩年絶対に譲られなかった一点というのは、曾我先生は往生は現在にあるという。それについて金子先生が『真宗領解集』という本の中にあるのですが、往生は命を終えた時だということを言われています。それで、「曾我先生は深い御体験に基づいてそのようにおっしゃっておられるでしょうから私は曾我先生の弟子です。そこは、私自身がまだ十分に頂き切れていないところがあるのではあろうと思います。」と言われています。あのお二人は凄いです。信仰の問題に妥協はされないのです、お互いに。

一方で曾我先生は同じ頃ですが、「金子大栄先生は、『大無量寿経』に彼土に救われる（彼土正定聚）」ということと此土で救われる（現生正定聚）」と両方があるとおっしゃって

おります。しかし、金子大栄先生は決めておられません。それを現生正定聚に決められたのが宗祖でしょう」と言われています。決めないことには始まらないということでしょうね。曾我先生はそれをお決めになるのが親鸞聖人でしょうと。お互いにそこは丁々発止です。お歳を召してから、最後までそこはお互いに子弟でありましても譲られない。

それで、曾我先生を金子先生が最後にお見舞いに行かれた時に「ようやく金子大栄先生がおっしゃっている気持ちが分かりました」とおっしゃられたのは、決して曾我先生が自分の説を撤回されたわけではありません。そうではなくて、これは僕の推察ですから越権になりますけれど、金子先生がおっしゃっておられることが、聖人の教えの中で、どこに位置づけられるのかと言いますか、どういう立場から金子先生がおっしゃっておられるのかということが分かったということではないのかと思うのです。それまで、恐らく金子先生がおっしゃっておられることを、曾我先生は否定的にとらえておられたのではないかと思えます。しかし、金子先生が「彼土にして」とおっしゃっておられるのは否定されるべきことではなくて、親鸞聖人の御法の中のここに位置付けることが出来るのではないかと申しますか、そのようなところからおっしゃっておられたのかと言いますか、そういう意味で、曾我先生はやっと分かりました。今までは否定的にとらえられていた。しかし否定されるべきことではなくて、ここに位置付けられることだと。そのように、僕はとって

おります。

ただ面白いのは、今申し上げましたように御歳を召してからも絶対にその一点についてはお互いに妥協されないのです。曾我先生は「信仰の問題は自己の絶対責任です」という言い方をされています。自己の絶対責任ということは、客観的に正否は決められないということでしょう。自分の生死の問題を、誰かが決めるわけにはいきません。それは自由だけれども、自己の絶対責任ですと。それ程厳しい問題なのでしょう。

曾我先生は決めていかれた先生です。教団から追放されたりなさりながらですね。二河白道の譬喩でも「すでにこの道あり。必ず度すべし」と決めたところから、釈迦の発遣と阿弥陀の召喚が聞こえるわけです。決めたところで、決められていく。その次第は大事ではないですか。

私は、曾我先生が九十歳の時に大谷大学へ入学したのですが、大学に入って先輩に高倉会館という場所にお話を聞きに何回か連れて行っていただきました。そのお話の中で覚えていきますのは、「どうせ死ぬのなら一歩前に進んで死のう」とおっしゃっていたことです。九十歳の曾我先生が、「どうせ死ぬのなら一歩前に進んで死のう」と。決まるのは仏様の計らいなのですが。信仰の厳しさは、それに先んじての決断にあるわけでしょう。分かる分からは決断はいりません。決断は自分の人生をこれによってとして、決定的な意味

を持っております。これにおいて救われていくのだと。決断ということがはたらいてこない限りは、あれもこれもなくなってしまいます。

岡田) 先生二河白道のことを本当に感じさせて頂きました。本当に自分が死のうと思っ
ていましたので。すとーんと落ちたような気がしました。そうしましたらものすごく身体が楽になりました。金縛りが解けたように。これが二河白道だと思ひまして、阿弥陀様ありがとうございました。ありがとうございますと感謝しました。

先生) 曾我先生は二河白道については良く話されました。

岡田) あっちだこっちだ揺れ動いている時はもうそういう気持ちにはなりません。本当にこれしかないと思わないと。やはり、それが自分の行く道を決めて頂いたのでしょうかね。そう感じさせてもらっております。

司会) 時間がきましたので、これで終了させて頂きます。先生有り難うございました。

光照寺様報恩講（2018・11・18）「真宗の要―『獲信』―」 廣瀬 惺

「1」親鸞聖人の教えの要かなめ

① 聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもつて本とせられそうろう。ほん（親鸞聖人から伝えられてきている教えのお心は、信心を根本とするということでもあります。）（「御文」5の10『聖典』837）

② 一心はすなわち清浄報土の真因なり（信心は、浄土を開く確かな因です）。

（『教行信証』『聖典』240）

「2」信心によって浄土が開かれるとはどういうことか

① 五濁・五苦等は、六道に通じて受けて、いまだ無き者はあらず、常にこれに逼悩す。もしこの苦を受けざる者は、すなわち凡数の摂にあらざるなり。（『教行信証』・『聖典』214）

逼↓セム 悩↓ナヤマス

② 一切の恐懼に、為に大安をなさん（すべての恐れを抱えて生きている衆生に、大きな安心の境を開こうと思います）。（法蔵菩薩の願心・『大経』『聖典』12）

③ 後生をすけたまえとたのみもうせば、この阿弥陀如来はふかくよろこびましまして、その

御身おんみより八万四千のおおきなる光明をはなちて、その光明のなかにそのひとをおさめいれて
おきたもうべし。
(『御文』『聖典』839)

④九十五種世くじゅうごしゅよをけがす 唯仏ゆいぶつ一道いちだうきよくます 菩提ぼだいに出到しゅつとうしてのみぞ 火宅かたくに還来げんらい自然じねんなる

(『正像末和讃』『聖典』501)

「3」信心とは

①信心といえる二字をばまことのころとよめるなり。まことのころというは、行者のわろ
き自力のころにてはたすからず、如来の他力のよきころにてたすかるがゆえに、まこと
のころとはもうすなり。(『御文』『聖典』776)

②弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとお
もいたつころのおこるとき、すなわち撰取せんしゆ不捨ふしゃの利益りやくにあずけしめたまうなり。

(『歎異抄』『聖典』626)

③「念仏申さんと思いたつ心の起るとき」はじめて真宗となる、自信の確立がそこにある、こ
の体験なくては、わが一生はむだごとであると思う。(西田辰正師『大地に聞く』)

「4」清沢満之師『他力の救済』

我、他力の救済を念ずるときは、我世に処するの道開け、我、他力の救済を忘るときは、我世に処するの道閉ず。

我、他力の救済を念ずるときは、我、物欲のために迷わさること少なく、我、他力の救済を忘るときは、我、物欲のために迷わさること多し。

我、他力の救済を念ずるときは、我が処するところに光明照し、我、他力の救済を忘るときは、我が処するところに黒闇覆う。

嗚呼、他力救済の念は、よく我をして迷倒苦悶の娑婆を脱して、悟達安楽の浄土に入らしむるが如し。我は実にこの念によりて、現に救済されつつあるを感じず。もし世に他力救済の教なかりせば、我は終に迷乱と悶絶とを免れざりしなるべし。しかるに今や濁浪治々の暗黒世裡にありて、夙に清風掃々の光明海中に遊ぶを得るもの、その大恩高德豈区々たる感謝嘆美の及ぶ所ならんや。

(明治36年6月6日に満39才で亡くなって行かれた先生が、その4月に東京での親鸞聖人ご誕生会に出された祝詞)

あとがき

本書は二〇一八年十一月十八日、第二十八回報恩講における廣瀬惺先生（元同朋大学教授、妙輪寺住職）のご法話の記録です。

先生は大学のご教授を長年お勤めになり、その後、御自坊のご住職として専念されご活躍されながら、本願のお心を常に聞思して、苦悩する人間、或いは、今日の現代社会において親鸞聖人のみ教えが、苦悩を超えて一人一人が尊い「いのち」に目覚めて生きることができるとのお心を通してながら味わっておられるのが先生の生涯のお仕事、お念仏生活の実践となっておられることを感じさせて頂いております。

先生のご法話より、「信心をはずして、救いとは何かと一生探しても見つからない。信心において救いが明らかになる。もし、信心抜きに救いということが言われているとしますなら、本当の意味ではたすからないのではないのでしょうか。」とお聞きして、『獲信』ということが胸にストンと入ってきました。また同時に本当の救いを求めているのかと投げかけられました。先生に「お念仏申される心が信心」とも教えて頂きました。すべて仏様から頂いたものと仰いでいく、そういう世界に出遇わせて頂く歩み、生活実感を通して歩んでいきたいと感じさせて頂きました。先生にはお忙しい中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申

し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様に感謝申し上げます。
本年三月三十一日に前住職が還浄しました。昨年、廣瀬先生と一期一会のお会いをさせて頂き、
ご法話を拝聴できましたことが貴重な法縁でありましたことをここに御礼申し上げます。合掌

二〇一九年十月二十七日

第二十九回報恩講にあたり

光照寺 住職 池田孝三郎

第二十八回 光照寺報恩講 法話

「真宗の要—『獲信』—」

廣瀬 惺先生 講述

2019年（令和元年）10月27日

発行 真宗大谷派 弘興山 光照寺

事務局 〒331-0821

埼玉県さいたま市北区别所町102-2

電話 048-651-2781